

〈原著論文〉

# リバティの花柄ファブリック

—100年以上も人気を保つ理由—

LIBERTY LTD's Floral Design Fabric : Reasons for Being Popular for More Than 100 Years

大屋 佳保里  
(Kaori OYA)

**Abstract** : LIBERTY Ltd's floral designs have characteristic features, These designs have a history of more than 100 years. In order to find the reasons why the company's products have been so popular, this study was conducted. The writer conducted the study through literature review, LIBERTY JAPAN's website and an interview at a LIBERTY shop in Japan.

After the Industrial Revolution, many products in the United Kingdom were poor in quality. Then LIBERTY Ltd. was established with a view to "provide many people with good quality goods which have distinctive designs". It succeeded in making good quality fabrics even by mass production. Also, it made use of popular designs of the time. Fads change with the passing of time, but the company created designs out of the past ones, which helped to preserve its traditional style.

Outside the U.K., there is only LIBERTY JAPAN Ltd., which shows Japan's high technological skills. Its products are made to appeal to Japanese people's tastes. They have been fond of floral designs and LIBERTY's traditional designs seem to be one of the factors for their growing demands.

**Key words** : fabric, LIBERTY Ltd., floral designs, LIBERTY JAPAN Ltd., the United Kingdom

## 1 緒言

花柄模様は様々な分野において使われているが、その中でも、リバティの花柄ファブリックには独特の魅力が感じられる。英国リバティ社の歴史は長く、時代とともに次々と移り変わる流行の中で、100年以上も人気を保ち続けている。本論では、創業からの理念、日本の伝統的なデザインとの関連、現在の生産販売動向を調査し、魅力の理由を明らかにしたい。

## 2 英国リバティ社の歴史と理念

英国リバティ社の歴史に関しては、山田眞實著『リバティ・デザイン』<sup>1)</sup>に詳述されている。以下は、同書を参考に、創立者の生い立ちからリバティファブリックの製作に至るまで、ならびに同社の理念についてまとめたものである。

英国リバティ社の創設者であるアーサー・ラセンビー・リバティ【図1】(Arthur Lasenby Liberty : 1843-1917)は、1843年に服地屋の家に生まれた。幼いころから芸術に関心があり、青年期には当時流行の発信地であったリージェント・ストリートにあるさまざまな商品を見たことで、鑑識眼や審美眼を養った。1862年には流行の最先端にあったファーマー・アンド・ロジャーズ

商會に就職し、多大なる功績を取めた。1874年に、独立を決意した。リバティ商會の1号店となるイースト・インディア・ハウスでは、当初東洋製の装飾品や良質なシルクを取り扱っていた。その後、東洋のシルクのようなファブリックの生産を試みた。織技術と染技術における様々な試行錯誤を凝らした結果、質を落とすことなく機械による大量生産をすることに成功した。質と量の両方をクリアしたリバティのファブリックは、多くの人々の手に渡り、人気を得るものとなった。この高品質なファブリックが、現在に至っても人気のあるリバティファブリックにつながっているのである。

山田は、リバティ商會を設立するにあたってのリバティの思いを、「良質で芸術的な価値の高い製品を適正な値段で販売し、広く流通させることは大切なことである。そして、そのような『良い趣味』の製品がより多くの人々の生活の中に入り込み、定着することはすばらしいことである。」<sup>2)</sup>と述べている。産業革命直後の英国において粗悪品が出回る中で、リバティは粗製濫造のものづくりから脱却するべく、この思いを生涯もち続け、それを実行した。この変わらぬ理念が現在の英国リバティ社を支えているのであろう。

### 3 小花模様が確立するまで

現在では、小花柄はリバティファブリックの代名詞といえよう。しかし、『GAP』に掲載されている城一夫の「文様博物館『時代を超えて永遠の花模様を創造するリバティ』」によると設立当初のファブリックは、現在とは異なるデザイン傾向であったという<sup>3)</sup>。以下では、城の前掲書を参考に<sup>4)</sup>、リバティデザインの特徴を考察した。

#### 3.1 ジャポニズム

リバティのプリントファブリックが生産され始めたのは1879年ごろであった。当時英国では、ジャポニズムの風潮が顕著に見られ、リバティ商會でも創立時は、水準の高いさまざまな日本製品を取り揃えていた。そのため、1880年ごろのプリントファブリックのデザインは、日本風なものであったのだ。その一つの例としてあげられるのがクリストファー・ドレッサーのデザインである。リバティの友人であるドレッサーは、日本に関心をもつデザイナーであり、リバティ商會へ何点かデザインを提供していた。【図2】

その中の一つである図2のデザインには、東洋の影響が見られる。英国とジャポニズムの関係性については5

章でさらに詳しく述べることにする。

#### 3.2 アール・ヌーボー

19世紀末になるとアール・ヌーボー様式が登場し、リバティはそれに注目した。そのためリバティプリントも、アール・ヌーボー様式のデザインへと傾向を変えている。この時期の代表的なデザインの一例は、1883年にウィリアム・モリスがデザインした「イチゴ泥棒(図3)」である。【図3】

これは、英国リバティ社の定番コレクションであるクラシックコレクションに現在も含まれているほど、当時から100年以上も人々を惹きつけるものとなった。

#### 3.3 アール・デコ

1917年に初代アーサー・ラセンビー・リバティが死去し、アイヴォー・スチュアート・リバティが2代目を務めた。この頃アール・デコ様式の風潮が見られたため、以前のアール・ヌーボー様式からアール・デコ様式へ上手く転換することができた。アール・デコ様式におけるデザインの特徴は、花柄模様である。代表的な作品は、シルバースタジオがデザインを手がけた「Poppy & Daisy (ポピー・アンド・デイジー)」(図4)で、非常に人気を集めた。【図4】

このデザインも現在のクラシックコレクションの中にも含まれている。城は、「この大ヒットを契機としてリバティ商會は、花柄こそが自社が生き残っていくための最も有効で実利的な布地プリントのモチーフであることを確信したと思われる。」<sup>5)</sup>と述べている。実際に、「Poppy & Daisy」の生産以来、アール・デコ様式を基調とした花柄プリントが数多く生産され、どれも大きな売れ行きにつながるようになった。

#### 3.4 小花模様の確立

1946年、第2次世界大戦での直接の被害を免れたリバティ社は、新たに動き出した。この時の社会状況を把握し、顧客層が変化することに注目したのだ。戦時中は、中年層の需要が多かったため、大人っぽいデザインであった。しかし、戦後は若者たちの需要が増すことを見込んで、若い女性にも受け入れられるようなデザインを採り入れる試みが行われた。様々なデザイナーが製作にあたったが、その中でも今日のリバティプリントにつながる小花柄模様を作り上げたのがバーナード・ネヴィルである。【図5】

こうしてリバティの小花柄が確立していったのだが、

英国リバティ社の全てのデザインが花柄であるわけではない。しかし、上記したデザインの数々やクラシックコレクションにあるデザインを見る限り、圧倒的に花や植物が図柄となったデザインが多く、そこにリバティらしさを感じられる。

#### 4 リバティプリントショップでの聞き取り調査

リバティについて、歴史やどのようなデザインがあるのかということは、文献などで知ることができる。しかし、英国のリバティファブリックと国産のものとの違いや、コピー商品の現状についてなどの情報は、文献などでは得られなかった。よって、それらの疑問を解消するために、2013年7月3日に京都市左京区にあるリバティプリントショップ トランテアンズのオーナー玉村利恵子氏にインタビューを行った。

以下は、インタビューによって得られた情報をまとめたものである。

##### ①リバティジャパンについて

日本には「リバティジャパン」という英国リバティ社から独立した会社がある。しかし、他国にはそのような独立したリバティの会社は存在しないようだ。玉村氏は、日本に対する英国リバティ社からの厚い信頼が感じられるという。

リバティジャパンのファブリック（エターナルコレクション）は、デザインはすべて英国リバティ社のものであるが、色は英国のものとは比べると薄くなっている。日本では工業規格が厳しく、洗濯堅牢度を考慮しなければならないために製品の色を薄くしている。しかし英国のものであっても、はじめは色が濃く、重みを感じられるが、洗濯を繰り返していけば色落ちしてリバティジャパンと同程度の色味になるということである。これは、ファブリックの色落ちの過程も、そのものの歴史と捉える英国と、ある程度色落ちせずに買った時の状態を保つことが良いとされる日本との、国柄の違いが生み出している結果であるという。

##### ②コピー商品

コピー商品は出回っていることは出回っているようである。コピー商品という一見悪いイメージをもってしまふ。しかし、著作権を100年と考えると、リバティの古いデザインは100年以上経っているため、コピーが可能となるかもしれないということだ。よって、コピー商品が悪いとは一概には言えないという。

##### ③オリジナルプリント

6章でも詳しく述べるが、モデルでありデザイナーで

もある雅姫が英国リバティ社とファブリックデザインのコラボレーションしたオリジナルプリントが大ブームを巻き起こした。それによってリバティの認知度が上がり、リバティ人気の火付けとなったのではないかという。また、2010年の日本人デザイナー（津森千里・渡邊良重・皆川明）によるオリジナルプリントの登場は、それまでに味わったことのないブレイクを感じたようだ。現在オリジナルプリントは販売されていないが、トランテアンだけでなく他の店舗でもいまだにリピートがかかるくらい人気なデザインであるという。

##### ④その他

店頭で同じデザインのもので英国のものと同産のものを実際に手に取り、質感を比較することができた。英国のタナローンは木綿そのもののザラとした手触りであったが、国産のものはシルク加工が施されており、ツルツルした質感であった。国産のものにシルク加工が施されているのは、布地の縮み率を軽減するためなどの理由があるようだ。

スパイスシリーズの「Pepper（ペッパー）」図6（1970年代）というデザインは、非常に細かい図柄で、プリントすることが難しいようだ。そのため、プリント機などを検査する際に「ペッパー」を使ってプリント機の性能を確かめるということである。【図6】

リバティのタナローンと同じくらいの値段の布の中では、タナローンに勝るものはないということだ。

##### ⑤インタビューを終えて

今回インタビューを行って最も興味深く感じたのは、英国リバティ社から独立した会社が日本にしか存在しないということだ。また、日本では、英国のリバティファブリックとは別に、日本人が受け入れやすいように日本の国柄に合った色味のもを生産しているということがわかった。色味を変化させることが可能であるというリバティ社の柔軟な姿勢を感じるとともに、日本のどこに信頼が置かれているのかということに疑問を感じた。それについては5章において明らかにしたい。

もう一点述べておきたいことは、コピー商品についてである。コピー商品の正当性というのは非常に難しい問題であると思う。玉村氏のように著作権を考えると、現在それほど市場に出回っておらず、100年以上経っているものであれば、それほど問題はないように思える。しかしリバティは3章でも述べたように、100年以上前のデザインが現在に至っても人気であり、実際に販売されている。このような場合、法律上では問題ないとしても、100年以上前のリバティデザインが現在でも流通し

ている限り、そのコピー商品を作るべきではないと感じてしまう。やはり、リバティにおけるコピー商品は問題視する必要があるのではないだろうか。

最後に、玉村氏が「リバティは日本人にとっても良く似合う。」と述べていたのが印象的であった。

## 5 英国リバティ社と日本の繋がり

### 5.1 英国における日本の型紙の影響と英国リバティ社のデザイン

3章において英国リバティ社の当初のファブリックデザインが、日本風なものであったということ述べた。当時の英国におけるジャポニズムという日本ブームが関係していたのだが、ジャポニズムという日本の文化を表す大きな枠組みの中でも日本の型紙が英国のデザインに大きな影響を与えていたということがわかってきた。それは、2012年に東京<sup>6)</sup>、京都<sup>7)</sup>、三重<sup>8)</sup>の3県で開催された『KATAGAMI Style』<sup>9)</sup>という展覧会の図録から読み取れる。

日本の型紙は、キモノを染めるときに用いられていた道具の一つである。その型紙を用いた染色技法を型染という。江戸時代には町人の間でも大流行し、少しずつ変化しながらも明治時代まで、その技法は残っていた。しかし、西洋の染色技法が普及するにつれ型染は徐々に廃れていったという<sup>10)</sup>。

図録にある高木陽子の「英国におけるジャポニズムと型紙」によると、どのようにして日本の型紙が英国に流入したのかについては、明らかでないという<sup>11)</sup>。しかし高木は、英国人による型紙の観察や報告から、型紙が英国に受け入れられ、普及するに至った要因の存在を2点明らかにしている<sup>12)</sup>。まず1点目は、型紙の模様が平面的で連続的であるということだ。連続模様というのは、機械生産のテキスタイルや壁紙などのデザインに使用することができ、多様な製品への応用を可能とした。2点目は、西洋のステンシルという模様付けの技法の存在である。ステンシルはもともと労働力節約のための粗野なものであったというが、日本の型紙を用いてステンシル刷りを行うことで、様々なものの表面に機械的であるが繊細さもある模様を付けることができたのである。このように型紙は、英国の室内装飾品の模様付けに適した道具であったということがわかる。

このような背景の下、英国リバティ社においても型紙の大きな影響が見られる。3章で述べたリバティ社のファブリックデザインの始まりである日本風なデザインは、この日本の型紙が関係していたのかもしれない。

英国リバティ社には、型紙コレクションが45点あり、1884年にはリバティ百貨店で型紙を販売していたという<sup>13)</sup>。しかし、それらの型紙を英国リバティ社が実際に使用していたかというところではないようだ。例えば、図7のデザインは、図8の型紙の図柄の構成や模様の形の雰囲気は似ているが、型紙をそのまま写したデザインとは思えない。【図7】【図8】

また、阿佐美淑子の「受け継がれる“KATAGAMI”デザインー現代の欧米のプロジェクトから」の中に、「アーカイブに型紙はあるが、同じ文様は発見できない<sup>14)</sup>」という記述からもわかるように、英国リバティ社は型紙をそのまま用いてはいなかったことがうかがえる。さらに、以下の英国リバティ社のデザイン2点(図9, 10)は近年発表されたものであるが、型紙を想起させるデザインとして図録にあげられている<sup>15)</sup>。【図9】【図10】

これらの、型紙がもともになっているように感じられるデザインの存在は、「19世紀末から20世紀初頭にかけて大流行した型紙のデザインは、ジャポニズムの終息とともに息絶えたのではない。100年を生き延び、現在、新たに流行の兆しを見せているのだ。<sup>16)</sup>」という阿佐美の叙述を裏付けている。

### 5.2 リバティジャパン

さらにリバティと日本の繋がりを深く感じさせるのは、リバティジャパンの存在である。リバティジャパン設立に至った経緯は、リバティジャパンのHPによると<sup>17)</sup>、まず1978年に英国リバティ社の布地が日本に輸出され、販売されるようになったことがきっかけとなったようである。その後1981年には、日本におけるプロジェクトチームが発足し、英国リバティ社のデザイン・ディレクターの指導による国内生産の開発へ踏み込んだ。そこで重要とされたのが、英国のリバティプリントを十分に再現することであった。そしてついに1988年、「高品質なリバティプリントを日本の顧客へ幅広く提供する<sup>18)</sup>」ことを目的とし、リバティジャパンが設立された。この目的はリバティ商会が設立された当初のリバティの理念と共通するものである。

4章のインタビューにおいて、筆者は、英国以外の世界の国々の中でリバティの独立した会社が存在するのは日本だけであるということを知った。インタビューでは、日本が英国リバティ社からの信頼を得ているのではないかということであったが、その信頼の根拠について、『LIBERTY PRINT 2012 spring & summer』2012の中

には、日本のプリント技術の高さが英国に認められているということが述べられており<sup>19)</sup>、英国のリバティプリントを忠実に再現できる日本の技術力が、リバティジャパンを設立することができた一つの大きな要因であるということが考えられる。また、染工場と水の関係性にも要因がある。同書には、リバティプリントの鮮やかな発色を出すためには、染工場が不純物の少ない水のきれいな場所に立地していなくてはならないということも記されている<sup>20)</sup>。日本の染工場では、水がきれいな場所にあるという条件も適っており、よりよくリバティプリントを表現することができるのであろう。

リバティジャパンでは、英国リバティ社と全く同じものばかりを生産しているわけではない。英国リバティ社にクラシックコレクションがあるように、日本においても、人気のあるデザインを集めたエターナルコレクションというものを設けている。また、2010年から4回にわたって行われたサンリオのハローキティとのコラボレーションもリバティジャパンならではの試みである<sup>21)</sup>。

#### 【図 11】

さらに、宮崎あおいの CM で話題のアースミュージック&エコロジーというファッションブランドとのコラボレーションも 2010 年より開始されている。それによってリバティに対する関心を様々な顧客層から引き出している。

このように、リバティジャパンでは日本人の趣向に合った様々な商品を展開しているのだ。

### 6 コラボレーションによるリバティファブリックの普及と英国リバティ社のデザインに対する姿勢

現在リバティ社では、様々なコラボレーションが行われている。その中でも、4, 5 章で触れた日本人の身近にあるキャラクターやデザイナー、ファッションブランドとのコラボレーションは、リバティに対する注目を集め、そこからリバティの普及へとつながるものと考えられる。

4 章におけるインタビューの回答により、英国リバティ社と日本人デザイナーがコラボレーションをしたオリジナルプリントの人気は高いものであったということがわかった。そこで 6 章では、日本人で初めて英国リバティ社とコラボレーションを行った雅姫のオリジナルプリントを採り上げることにする。以下は雅姫の『雅姫のリバティノート』<sup>22)</sup>に書かれている、3 点のオリジナルプリントの製作過程の概要である。

英国リバティ社と雅姫<sup>23)</sup>、ホビラホビレ<sup>24)</sup>との間

でオリジナルプリントを製作することになったのは、2005 年秋のことであった。

〈製作過程〉

①作りたいデザインのイメージに近いものを、過去のリバティのプリントサンプルの中から選ぶ。

②①で選んだもととなるデザインに、細かく変更をしていく。

③色を決める。

デザイン作業（柄の描き起こし、色づけ）は、英国リバティ社デザイナー、ポリー・メイソンが雅姫のリクエストをもとに行ったそうだ。それぞれのオリジナルプリントのデザインは、大花柄（Masaki & Garden：図 12）とブーケ柄（Birthday：図 13）と動植物柄（Gre& Mori）である。その中でも植物を中心とした大花柄とブーケ柄の 2 点のデザイン過程において雅姫は、ポリーが大切にしていた事柄があるという<sup>25)</sup>。それは、植物本来の姿でデザイン起こしていくことである。植物の細かな蔓にまでこだわりをもったり、ブーケにする花や葉を選ぶ際に、ただ好きな植物を組み合わせるのではなく、選んだ花と葉の季節が正しく一致しているかどうかという点にまで目を向けてデザインしているのである。【図 12】

【図 13】

3 つのオリジナルプリントは 1 年がかりで完成したようだ。製作過程からは、リバティの伝統のスタイルを壊さないための過去のサンプルをもとに製作することや、自然に見える植物の姿を大切に、季節を考慮に入れた上で植物の組み合わせをするといったこだわりがうかがえる。英国リバティ社の伝統を重んじる精神や、デザインに対する真摯な取り組みが感じられる。

## 7 結 語

英国リバティ社は、リバティ商会設立当初、産業革命直後の機械生産粗製濫造の社会背景時代のころから、質と量との両立をめざしてきた。“良質でデザイン性の高い製品を多くの人々に提供する”という理念である。

本論では特に“デザイン性”に重点を置き、リバティ人気、とりわけ日本における普遍的な人気の理由を探ってきた。そこからわかったことは、次の 2 点である。

### 1) 流行の取り入れ方

流行は、一時は輝きを放つが、いずれ廃れるものである。リバティファブリックにおいては、100 年以上前のものが定番（クラシックコレクション）として根強い人気をもつ一方で、近年のデザインも注目をあびている。雅姫やホビラホビレとのコラボレーション企画の事

例でみてきたように、伝統スタイルを壊さないためのきめ細かい配慮により、リバティらしさが継承されるのである。

日本のキモノ染色で用いてきた「型紙」の模様がリバティ社の設立当初のデザインに影響を与えたことに触れてきた。近年でもその影響が見られるデザインが存在するほど、型紙のデザイン性は生き続けている。これは、単に日本の型紙の影響力が大きかったと考えるよりも、リバティ社が、伝統スタイルを重視する姿勢の表れであると考えの方が適切であろう。

## 2) 日本人の技術力と嗜好性

玉村氏によれば、リバティファブリックを英国リバティ社以外で独立して生産販売しているという面で、リバティジャパンは世界的に見て特異な存在であるという。高度な技術力や水質のよさが、精密な模様を染色するのに適すると認められたことを意味している。リバティファブリックは世界中で人気があるわけだが、とりわけ日本人は花模様を好むのではないかと思う。日本人と花模様の関係性について明確な根拠を見つけ出すことはできなかったが、筆者は、日本人と花模様の繋がりを考えてみたい。まず日本の着物文化を念頭に置くべきであろう。日本では四季に合わせた花模様がデザインのモチーフとなり、人々の身近にあった。リバティファブリックのデザインにおいて、植物本来の姿や、季節感を重視することはキモノのデザインに通じるものがある。花模様の魅力を知る日本人を無意識のうちにもひきつける魅力につながっているのであろう。

## 注

- 1) 山田眞實『リバティ・デザイン：「文化資本」としての「よき趣味（グッド・テイスト）」』創元社，1999，pp.85-135
- 2) 山田，前掲書 p.104
- 3) 城一夫「文様博物館『時代を超えて永遠の花模様を創造するリバティ』」，『GAP』111，1996，p.101
- 4) 城，前掲書 pp.100-103
- 5) 城，前掲書 p.102
- 6) 三菱一号美術館，会期：2012年4月6日～5月27日
- 7) 京都国立近代美術館，会期：2012年7月7日～8月19日
- 8) 京都国立近代美術館，会期：2012年7月7日～8月19日
- 9) 三菱一号美術館 [ほか] 編『KATAGAMI Style』

日本経済新聞社，2012，p.15，77，92，237，243，pp.250-255，268-270，310-313

- 10) 三菱一号美術館 [ほか]，前掲書 p.15
- 11) 三菱一号美術館 [ほか]，前掲書 p.269
- 12) 三菱一号美術館 [ほか]，前掲書 pp.269-270
- 13) 三菱一号美術館 [ほか]，前掲書 p.269
- 14) 三菱一号美術館 [ほか]，前掲書 p.313
- 15) 三菱一号美術館 [ほか]，前掲書 p.243
- 16) 三菱一号美術館 [ほか]，前掲書 p.237
- 17) LIBERTY JAPAN「リバティ社の歴史 日本との繋がり」(2014年9月20日アクセス)  
[http://www.liberty-japan.co.jp/lb\\_history/now.html](http://www.liberty-japan.co.jp/lb_history/now.html)
- 18) LIBERTY JAPAN，前掲
- 19) 藤定修一 [ほか] 編『LIBERTY PRINT 2012 spring & summer』宝島社，2012，p.19
- 20) 藤定 [ほか]，前掲書 p.19
- 21) ハローキティが誕生して40周年にあたる2014年，リバティファブリックとのコラボレーションが再開された。(LIBERTY JAPAN  
[http://www.liberty-japan.co.jp/lb\\_news/index.html](http://www.liberty-japan.co.jp/lb_news/index.html)  
2014年9月20日アクセス)
- 22) 雅姫『雅姫のリバティノート』集英社，2007，pp.50-73
- 23) モデルであり，東京・自由が丘のキッズ&レディーススウエアの店『ハグ オー ワー』と，キッチンクロス専門店『Cloth & Cross』のデザイナー。(雅姫『雅姫のリバティノート』集英社，2007，p.128)  
2010年の秋には，再び英国リバティ社とコラボレーションを行い，3柄発表している。(雅姫『LIBERTY CHIC』集英社，2011，p.32)
- 24) 全国展開の手芸店。
- 25) 雅姫，前掲書 pp.54-56

## 参考資料

- ・1981.11/「染織の周辺(8)：リバティ・スタイル」／吉田光邦／染織 α/8
- ・1996.11.12/「文様博物館『時代を超えて永遠の花模様を創造するリバティ』」／城一夫／GAP/111/p.100-103
- ・1999.4/『リバティ・デザイン：「文化資本」としての「よき趣味（グッド・テイスト）」』／山田眞實／創元社
- ・2003.2/「越境するファッション(6)：LONDON

リバティの花柄ファブリック

- 1900]／深井晃子／ハイファッション／289/p.193-197
- ・ 2007. 3. 12／『雅姫のリバティノート』／雅姫／集英社
- ・ 2010. 3. 27／『LIBERTY PRINT 1875-2010 SPRING & SUMMER』／藤沢修一 [ほか] 編／宝島社
- ・ 2010. 8. 14／『イギリスのリバティ手帖』／高橋かおる編／ピエ・ブックス
- ・ 2011. 2. 27／『LIBERTY PRINT 2011 spring & summer』／藤沢修一 [ほか] 編／宝島社
- ・ 2011. 5. 30／『LIBERTY CHIC』／雅姫／集英社
- ・ 2012. 3. 25／『LIBERTY PRINT 2012 spring & summer』／藤沢修一 [ほか] 編／宝島社
- ・ 2012. 11. 5／『HELLO KITTY LovesLIBERTY PRINT』／学研教育出版
- ・ 2012／展覧会図録『KATAGAMI Style』／三菱一号美術館 [ほか] 編／日本経済新聞社
- ・ 2013. 11. 29／『LIBERTY PRINT 2014 Seasonal Collection』／吉村理子編／学研教育出版
- ・ LIBERTY JAPAN HP  
<http://www.liberty-japan.co.jp/>
- ・ LIBERTY LONDON HP  
<http://www.liberty.co.uk/>
- ・ インタビュー  
リバティプリントショップ トランテアン  
京都市西京区松尾木ノ曾町 51-6  
オーナー 玉村利恵子氏 (2013年7月3日インタビュー)

(2014年11月6日受理)



図1 アーサー・ラセンビー・リバティ  
(LIBERTY LONDON HP  
<http://www.liberty.co.uk/AboutLiberty/article/fcp-content> 2014年9月20日アクセス)



図2 クリストファー・ドレッサーのデザイン  
(山田眞實『リバティ・デザイン：「文化資本」  
としての「よき趣味 (グッド・テイスト)」』,  
創元社, 1999, p.126)



図 3 Strawberry Thief  
(LIBERTY JAPAN HP  
[http : //www.liberty-japan.co.jp/lb\\_fabric/  
classic/StrawberryThief 004.html](http://www.liberty-japan.co.jp/lb_fabric/classic/StrawberryThief_004.html)  
2014 年 9 月 20 日アクセス)



図 4 Poppy & Daisy  
(LIBERTY JAPAN HP  
[http : //www.liberty-japan.co.jp/lb\\_fabric/  
classic/PoppyDaisy 002.html](http://www.liberty-japan.co.jp/lb_fabric/classic/PoppyDaisy_002.html)  
2014 年 9 月 20 日アクセス)



図 5 Elysian  
(LIBERTY JAPAN HP  
[http : //www.liberty-japan.co.jp/lb\\_fabric/  
classic/Elysian 001.html](http://www.liberty-japan.co.jp/lb_fabric/classic/Elysian_001.html)  
2014 年 9 月 20 日アクセス)



図 6 Pepper  
(LIBERTY JAPAN HP  
[http : //www.liberty-japan.co.jp/lb\\_fabric/  
classic/Pepper 002.html](http://www.liberty-japan.co.jp/lb_fabric/classic/Pepper_002.html)  
2014 年 9 月 20 日アクセス)



リバティの花柄ファブリック



図7 リバティ商会, シラン・シルク見本帳, 1900-05年頃  
(三菱一号美術館 [ほか] 編『KATAGAMI Style』  
日本経済新聞社, 2012, p.92)

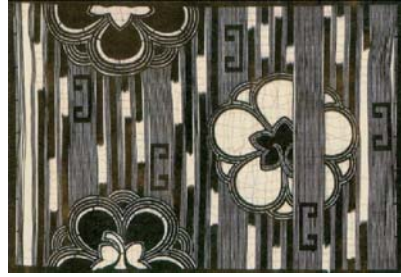


図8 型紙 梅にvari芝翫縞  
(三菱一号美術館 [ほか] 編  
『KATAGAMI Style』  
日本経済新聞社, 2012, p.92)

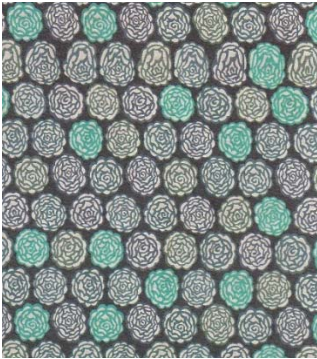


図9 リバティ・デザイン・スタジオ, テキス  
スタイル〈リバティ・アート・ファブリックス  
《トマリー》, n.d. (2011年製作)  
(三菱一号美術館 [ほか] 編『KATAGAMI Style』  
日本経済新聞社, 2012, p.243)



図10 テキスタイル〈リバティ・アート・ファ  
ブリックス《ステファン》, n.d. (2011年製作)  
(三菱一号美術館 [ほか] 編『KATAGAMI Style』  
日本経済新聞社, 2012, p.243)



図 11 Haruka Daisy (40周年記念コレクション)  
(LIBERTY JAPAN HP  
[http://www.liberty-japan.co.jp/lb\\_fabric/kitty-liberty/40TH/HarukaDaisy\\_A.html](http://www.liberty-japan.co.jp/lb_fabric/kitty-liberty/40TH/HarukaDaisy_A.html) 2014年9月20日アクセス)



図 12 Masaki & Garden  
(雅姫『雅姫のリバティノート』集英社, 2007, p.57)



図 13 Birthday  
(雅姫『雅姫のリバティノート』集英社, 2007, p.71)